

自閉スペクトラム症児の遊びの発達的变化と大人の注意共有方略

田崎 榛菜

【背景・目的】ASD児は、遊びが単純で繰り返しが多く、型にはまったものが多いという特徴を持っていることや (Jarrold et al., 1993)、ふり遊びなどの象徴遊びに困難を示すことから (Hadwin et al., 1996; Baron-Cohen, 1987)、ASD児の遊びの発達や象徴遊びの獲得に焦点を当てた介入に関して多くの研究が行われており (Thorp et al., 1995; Kasari et al., 2006; Kasari et al., 2010; Stahmer & Ingersoll, 2004; Wong & Kwan, 2010)、遊びの獲得に関して、子どもの興味や関心に寄り添うことが重要であるとされている。しかし、ASD児の遊びの発達に関する介入の効果については多くの研究で検討されているものの、自由遊び場面における大人の関わりかけと ASD児の遊びの両方を観察し、どのような関わりが児の遊びに影響を与えるのかについて検討したものは少ない。本研究は、個別療育の自由遊び場面において、大人の注意共有方略によって子どもの反応がどのように変化するかを検討するとともに、子どもの遊びへの取り組みを変化させ得る関わりかけを積み重ねることで、その後の子どもの遊びにどのような発達的变化が見られるのかについて明らかにすることを目的として行われた。

【方法】対象児は、A 児童発達支援センターに通園しており、大学の研究室での個別療育に参加した ASD児 9名であった (男児 8名、女児 1名)。個別療育の部屋に対象児が入室してすぐに開始される自由遊びの冒頭 10分間を療育室に三脚で固定されたビデオカメラ2台で撮影し、後に映像を再生しながら観察を行った。大人の注意共有方略を用いた関わりかけ (子どもの興味・関心や注意の方向に応答的な方略である「維持」「発展」と、子どもの注意の方向を変えさせるような方略である「転換」とそれに対する対象児の反応の生起率、対象児が遊んでいる玩具の種類とその遊び方の種類数、1つの玩具を用いた遊びの継続時間、1つの遊び方での遊びの継続時間を記録した。さらに、Belsky & Most (1981)の遊びの発達スケールを参考にして作成したカテゴリをもとに、自由遊び場面において生じた遊びを分類し、それぞれの発達レベルに該当する遊びの種類数と継続時間を算出した。

【結果と考察】子どもの興味・関心や注意の方向に対して応答的な方略に対しては対象児の受容反応がより引き出されやすいこと、また、子どもの注意の対象を他のものに変えさせるような方略は対象児に無視されやすいということが明らかになった。また、遊びの中で積極的な受容反応が多く生起する児ほど、療育終盤における1つの玩具を用いた遊びの継続時間が長くなる傾向があることが分かった。さらに遊びの発達スケールに関しては、子どもの興味・関心に沿った関わりかけを子どもが積極的に受容することが多いほど、「ふり・見立て遊び」の種類数が多くなり、継続時間が長くなることが分かった。また、Belsky & Most (1981)における定型発達児のデータと比べ、本研究の対象児の遊びでは、「過渡期の遊び (機能的遊びから象徴遊びへの移行を示すような遊び)」や「ふり・見立て遊び」の割合が少ないという結果が得られ、ASD児の遊びの特徴が示唆された。結論として、子どもの興味・関心や注意の方向に対して応答的な方略は ASD児の受容反応を引き出しやすく、さらにそのような関わりかけに対する児の積極的な受容反応が遊びの発達とも関連しているということが明らかになった。ASD児の遊びの発達を考える際に、児の注意の方向に注目しながら児の興味の対象を察知し、それに沿った関わりを行うことの重要性が示唆された。(比較発達心理学)